

大詩人

幸田露伴

縁外縁

旅に道連の味は知らねど
世は情ある女の事

但しどこやらに怖い所あり難い所

我元來洒落といふ事を知らず
奇と唱ふる者にもあら
で唯ふらくと五尺の殻を負ふ
蝸牛の浮れ心止み難く
東西南北に這ひまはりて
覺束なき角頭の眼に力の及ぶ
だけの世を見たく。いざ
いらば當世江口の君の宿假さ
ず宇治の華族様煎湯一杯を
惜み玉ふとも關はじよ。
里遠しいざ露と寐ん
まくらとは一歳陸奥の獨り
旅夜更て野末に疲れたる
時の吟。それより露伴と
戒名して傾て脆くも下枝を
落なば。摺附木となりて
成佛する大木の蔭小暗き
近邊に。何の功をも爲さ
ざる苦の碧みを添へん
丈の願ひにて。嘆語に
ばかり滴水とくく試みに
浮世そがばやと果敢なき
僧上是れ無分別なる
妄想の置所。我から呆る
程定まらぬ魂魄宙宇に
彷徨し三十年來。自ら
笑ふ一生定力なく行藏
多くは業風に吹る

と古人の遺されし金句に。歳の市立つ冬の半夜蝙蝠騒
ぐ夏の夕暮などは膽を冷し骨を焚く感じを起す事もあ
りしが。三日坊主の一時精進。後はゆつたりつたり
にて。丁度明治二十二年四月の頃は。中禪寺の奥。白
根が嶽の下湯の湖のほとりの客舎に五目並べの修業を
兼て病痾を養ひ居たりしに有難き温泉の功能。忽ち平
癒するや否。丈夫素より存す衛天の氣なぞといきり出
して元來し道を歸るを嫌ひ。御亭主是から先へ行く道
は無いかと問へば。どうも此處は行留りの山の中。見
らるゝ通り前は前白根奥白根雲の上に頭を出して居る
始末。登山は夏さへ六かし。其續き樵手の方は魂粹
と俗に呼ぶ木叢峠。此頂上は上野下野兩嶽の境界山々
折り累なりて當方より越る六里の間に暖湯飲むべき家
もなし。殊に時候大分違ひて大澤徳次良あたりは。野
州の名花八汐の眞盛りなれど此近邊はそれもまだ咲か
ず。況して時は一面の雪五尺六尺谷間には積り居りて
道も礫には知れず。今年になつてから越した人は指の

數に足らぬ位。とても遊び半分なぞに行かへるべき地に
あらず。御客様是非もなし中禪寺まで戻りあつて足
尾とか庚申山とか里近き孫山でも具物致されよとの言
葉。あのれ我を都會育ちの柔弱者と侮つたりや。其義
ならば旋毛曲りの性根天の邪鬼の意氣地見せつけ呉れ
んと詰らぬ事に偽勢張り。股引もなき細臍踏みはだけ
て。其時何程の事あらん焼飯作れ草鞋買て来よ。少し
ばかり難義でも同じ道を歸るより面白からん鼻歌を
山の神に聞せて越ん。さてく途方もない事。雪香な
らでは中々凍ゆべし。強てどならば國境まで案内者就
はるべし。然し名産の肉苳蓉取つて腎臓にでもせんと
の御思召ならば時節懸し。酔興は要らぬ者と昔時より
の教もあるものを。兩倒な事愚圖々々せずと我云ふ通
りにせよ。案内者は就ふべし雪香も買ふべしと罵りて
裾其儘にグイと端折り。香しつかりと穿き締め。身の
丈六尺計りの樵夫を案内として心いさましく登りけ
る

も息張りて追付ば其大男ふりかへりて。此通りの雪な
れば道も何もある譯では無ければ谷を傳はりて行くだ
けの分。あなた様若し堪忍強く少時の難澁を忍ばれる
なら一層勾配の烈しき代り頂上へ達する近道を行きま
せうかと尋られ。エーまゝの皮そう仕やうと決断し。
又登る一里あまり縦の木柵の木タモの木ドロの木唐松
など生ひ茂りて蔭暗く。此山の本名木叢時の名は體を
あらはして森々と物凄く。梢を渡る風に露はらくど
襟首に落ち。顔を撲つ空翠は引く息に伴なつて腦懸し。
雪に印せる兎鹿の足痕漸く減りて。耳に音信し鳥の聲
も次第々々に絶え。身は攀ち登るの苦しさに汗ばみな
がら心を掩ひし五慾の塵衣は一枚一枚剥るゝ如く昨日
の榮華縱横無盡に神通を逞しくせし第六識魔王は眷屬
味方を失ひて落ら淋しく。何といふ事はなけれど世界
よりの落武者となつたる様に心懸せられて人間老衰の
曉五官半死して最期に近よりたらん時此境界に似通
ふ者あらば何程なさけなく如何程力弱く如何程頼み少
なき者ならん乎とそいふ悲しく思ふ時岩を透すまで鋭
き鳥の聲與黒の梢より射出されヤヨツとして頸を縮む
る途端眼にはくらくど湧き亂るゝ唐草様の者見えし
が。是にてお別れ申します此處兩國の境界も頂上な

り。是より左り手左り手と谷を傳ひ下らるれば一つのは沼あり。其沼の左をまたまた下らるれば片科川の水源地ぞ坂東太郎と後に呼ばるゝそれに傍て行けなば温泉湧き出る小川村といふに着べし。此處より其村までまだ四里餘少しも人家なし。能々氣を注げて迷はぬ様致されよさらばと案内者の云ふに又一段に淋しさを増し今朝の似非勇氣挫け果て茫然と見下すに曇り空の日の光り力なく常は見ゆると聞し會津の方の山々も雲がくれて見えす。流石に足の爪先佇む間に冷を覺えける。案内者に別かれて獨り下る覺束なさ。雪沓なれば滑りし木の枝に衣を裂き。行けども行けども迷ふたりや沼の邊りに出ず。樺の木折きて火を燒き。あたりながら燒飯を取り出して食ふに木屑を喉様にて甘からぬとを凌ぎたれば色々方角を考へ正して進む。元より時計も持ぬ男なれば時刻分らず頻りと氣をあせる中ほの暗くなつて來たれば。是れ大變なり又々曾て荒山に行き暮したる時の様になりては叶はじと急ぐ程に沼のほとり來たり。嬉しやと思へは日は冬の沒り易く。雪は最早無けれど沓の底は切れて足は痛し。折ふしプツリ

と沓の紐きれて悲しやと道の邊に坐りて夫を繕ひ繋ぐんとするにアツ燈の光り幽に動くを見付。嬉しや嬉しやとたどり行けば丸木の掘立柱直營の屋根したる小家尙舊の堅き山櫻の大木の根方に立り。所からどて時候のかくも變る者ぞと驚かれぬ。萩の垣結ふ丈の事とせざして枝折戸の面倒嫌へるにや家の横手に幅一間計りの小河流れば覺して水呼ぶ世話も要らぬと見えたり。此様にしても世は渡らるゝ者と有り難く尙近く寄りて火の洩るゝ戸の際に立ち。中禪寺の湯元より峠越して道に迷ひし者盡く疲れ果殊さら夜になりて難義いたします。小川村まではまだどれ程の道程でござりますか。且は雪沓を切らして歩み難く困りますに草鞋一足譲り下さるまいかと云へば。それは〳〵お氣の毒な事小川まではまう二十町ばかり川に添ふて行かれさへすれば間違なし。お履物をお切らしなされては眞に御難義ならんが牛僧草鞋一足もない事耻かしや。然し私しのはき捨の草履にても宜しくば參らせませうと云はアラ不思議なまめかしき女の聲かゝる山中に似合しからず。されど是も獵師か何ぞの娘ならん。唯弱りたるは足の裏痛み惱みて右の小指左りの拇指は生爪まで剥したれば是より二十町到底あるけず。出來る事なら

一夜の宿を頼まんど。眞に申し兼ねたれど小川まで二十町と承はりては疲れたる身の中々に歩み難く。痛み所さへあれば憫然と思ひ召て一夜の宿りを許したまへ。それは思ひも寄らぬ事。女子許りなればと云ひ乍ら板戸引き開け身體を半分出す女年は二十四五なるべし。後面に燈を負ひて後光さす天女の如く其色の皎その其眼のばつちりとしたる。其眉つきの長く柔和なる其口元の小さく締りたる。其髪の日洗ひたる乎と覺えて結もせず。後に投掛て末の方を引裂きたる白紙にて一寸纏めたる毛のふさ／＼としてくねらざる美しさは人にあらずあのれ妖怪かど三足ほど退つて覗へば女も我をつく／＼と見て。傷ましや前様の風情御足のあちこち怪我なされしか紅き者も見ゆるに御袖も草木に障えられてか。綻ひ切れ。御顔色もいたく衰へ苦し氣に居らせらるゝに成程是より小川まで僅かの道なれど行き惱み玉ふべし。留め難き所なれども世捨人にもあらぬ御方に假の宿りに心止むなとも申し難ければ枉て一夜を明させ申すべし。強くお断絶申すもつらし。いざ爰に御腰ひけれよ。御洗足の湯持て参らんと云はれて氣味の惡さ。今さら進出さんも流石なれば持前のづう／＼しく腰打掛て。有難しと禮いふ中小桶に熱き湯

汲み來りて甲斐々々しく洗ひくれんとするを。是は恐れ入り升ナニ自分で濯ぎます。イエ／＼御遠慮なしにサア御足をお伸しあそばせと問答する暇に指の股の洗まで奇麗に落て疊の上にあがり丁寧に挨拶すれば。女莞爾と笑ひながら。山中なれば御馳走も出来ぬと幸ひ小川村と同じ脈の温泉の背戸の方に湧き居れば一風呂御這入りあつて一日の疲勞をお休めなされ。サア此方へござれ御背中を流しませうか。ハテ狐にでも誑さるるではないかと内々危ふみ居る我手を取る様にして。湯殿へと申しても片尻附雨露を凌ぐばかり。いぶせけれど湯は天然の靈泉まことに能く暖まりますといふ口上嘘らしくなく底まで見え透く清き湯槽大事なからうと這入れば無類の心持遙に湯元より結構畫間のつらかりしも忘れ悠々と揚つて来るを待ち付て女。御召憎うはござりませうが御着物の綻びを縫ふてあげます問是をど後より引かけて呉れるはばてつかぬフラチルの浴衣に重ねたる黒出八丈の綿入れ女物なれば又ありてユキ無く兩手のぬつと出るは可笑けれど親切かたじけなし。餘程ふしぎな取り扱ひどうした運命だらうと怪しみながら少し煙にまかれて。ハイハイ是はどうも恐縮。御帯にも岩角の苔が付て居りますすれば可笑ども之をど

笑ひながら出すは緋縮緬のしごき。ハイ、ど帯にし
て是も大方藤蔓か知れぬと觀念し座敷へ来て居爐裏の
傍に坐る肩へ羽折り呉るゝは八反の鼠小辨慶のぬんぬ
こ。湯覺をなされて若し風邪でも召ては何處ぞのお
方に濟みませぬと味な口き。どん、ど柴折くべ自
在にかけし鍋の沸き立を取り下して。定めし御空腹で
ござんしたらう。サア御膳も出来ましたがお氣の毒な
は麥飯暖い丈を取り柄に山家の不自由をお許しなさ
れと取り出す蝶足の八寸盛て呉るゝ山獨活の味噌汁香
氣枕に溢る。禮云ひながら我は甘く食へば女も。妾も
御一所に片付けて仕まひましよかと最と無造作に喰ふに
膳なく。枕を爐縁に置んとして流石に馴れずやためた
ふを。此膳お用ゐなされと突やれば。そんならおどり
膳とやらに。オホ、御免なされと顔を赤めず。宵よ
りの所業、合點の行ふ事どものみなり。
さて飯も了りたれば女は我に關はず。手ばしこく膳枕
どり片付けて火影ゆらぐ行燈の下に坐り。我衣物の綻ひ
を綴ぐる様。十年も連添ふたる女房の様に見榮も色氣
もなく仕こなす不思議さ。さりどては何物ならん。世
を捨たる女かと思れば黒髪句やかたにして尼にもあら
ず。世を捨ざる女かと思れば此容色を問ふ人もなき深

山の獨り住訝かしく。何にせよ口不調法なる我口惜く
問ひ出る詞を知らず様々考ふる中女は綻ひ繕ひ了りて
其まゝ疊み置き。爐の傍に來て我どさしむかひ笑まし
氣に。若き御方の何故の御旅行か知れぬと定めし面白
事もござりましたらうにチトお聞せなされど。却つて
向ふより切り掛られ。イヤイヤ我等凡夫の癖に山ある
きは好なれど歌の一つも讀み得ねば面白き所あつても
お話し申す言葉拙し。お前様こそ見受る所御風流の御
生活。由緒あるお方とは先程より思ひましたがりど
ては盛りの御身を無殘の山住み。如何なる仔細か御話
しなされてよき事ならば。ホ、中々の事賤の女に何の
由緒のありませう。唯妾しは妙と申す氣輕者去歲より
此處に移りしばかり。おまへ様は。露伴と名乗る氣輕
者。扱は氣輕と云はるゝか。如何にも。何の上の氣輕。
我は何とも知らず山に浮れ水に浮るゝだけの氣輕。お
まへ様は。浮世を厭ふだけの氣輕。ハテ怪しからぬ浮
世を眞誠に厭ひ玉ひなば御頭をもゴツソリと剃り丸め
玉ひ。墨染の衣に御身をやつされ。朝は山路に花を採
り夕は溪川に閑伽を汲て供ぜられ。看經念佛の勤のあ
るべきに身數さへ持ち玉はざる計りか。昔しの人には美
しき面に焚鐵當たるさへあるに前様は誰に見よとて

の黒髪油こそ無れしなやかに。友仙の御下着紅こそな
けれ仇めかしく色作らせらるゝ事疑はし。世を疎み玉
ふとは詐り深く云ひ替せし殿御を恨むる筋の有るかな
どにて口舌の餘り強玉ふての山籠り。思はせぶりの初
紅葉あきくちから濃ふなるといふ色手管。是は失禮圖
に乗て饒舌りました。アラ此人の口の憎さや。其様な
浮たる事にはあらず全く世をば避け厭ひて。マザ／＼
とした御談さらば世を厭ふとは如何なる譯と押返し
て問ば。要らぬ事尋ねて可惜夜の更るに御休みなされ
と身を起して戸棚より出すは綿まづしき寝衣蒲團かと
思ひの外。緋緞子の蒲團淺黄綸子の抱卷紅羽二重の裏
付て獵虎の襟。驚かるゝ贅澤。サア御寝なれと我を押
やりて小屏風立まはすに是非なく話しを中途にして。
然らばお先へ御免蒙ると横になれば。蓬萊の夢見さう
な雲鶴の錦の丸枕に茶を詰めるやゆかしき香。鼻の頭
に立つ不審どうも眠られへばこそ。ソツと屏風の外を
覗けば爐の傍に尙端然と坐して何やらを讀み居る美し
き人形の様なり。一時間も経て我は尙寐られぬは又覗
くに矢張動かず。二時間も過ぎて又伺ふに女は元の通
り。眞夜中頃にも心愈々寝て後先揃はぬ此家の始末を
考へながら又覗けば女は頻りと火箸もて灰掻き起し居

れど柴木最早盡て爐の暖ならず。木叢峠の麓なれば流
石に寒氣を覺えてや。獨り言に温泉にでも入らんと云
ひ捨てゝ湯殿の方へ行けるが少時して歸れば爐の火は
全く細々となりしに尙其傍に端然と坐りたる様子何の
用ありとも見え。全く寐るべき夜具なき故と知れた
れば。我男の身として自分ばかり暖まり居るをさもし
き様に思ひなし。今眼さめたる振して突と起出れば。
御手水かど案内するに連れ。用たして戻りがけ心付た
る顔して。お妙さままだおよらずか。ハイ。誰人を待
るゝ戀か知らぬど大分夜も更けましたらうに。ホ、御
調戲なされずと能うおやすみなされ。イヤ違ひました
ら幾重にもお詫をします。お獨り住の御様子其處へ
推て一泊を願ひましたれば御臥床を奪ひましたりども
危ぶみます。若し萬一左様なれば我等こそ男の身野宿
の費もござれば柱に憑れて眠る一夜位苦しくもならざ
れお前様さうして居られては心苦し。寢温もりの殘
りしは氣味あしくも思しめさんがどうかお休みなされ
と云へば顔少し赤め。御言葉の通り眞に夜具一揃より
待されどおとめ申したる時より爰しは斯うして夜を明
して大事なと思ひ定めましたれば御構ひなく。それ
ではどうも。そう仰しやらずと。我らが困ります。爰

しが困ります。マアお前様御臥みなされ。マアくあ
 なた御寝なれ。其では際限なし。露伴男でござる。瘦
 我慢致して是より御暇申す。女性に難儀さして我心よ
 く眠らば一生の環瑤母の手前朋友の手前耻かしく。夜
 道まだく樂な事なり。それ程までに仰せらるゝを背
 き難し。あなたに夜道歩行せましては妾しの心遣ひ皆
 空となる事なれば御言葉には従ひませうが。それでは
 あなたに寢床暖めて頂いた様な者。のめくど其にく
 るまつてあなたを火もなき爐の傍に丸寝さしては假令
 ば妾し夢に戀人に逢ふとも面白からず。妙も女でござ
 んす。妾し一生の環瑤持佛の手前はづかし。どうし
 てあなたを能ふお臥ませ申さでは。其様に言葉を廻
 されてはどうして良いやら譯が分らず。無骨者の我等
 閉口しますに。ホ、閉口なされたら温順く妾の云ふ
 事を聞てお臥みあれ。イヤく拙者の申す通りになさ
 れ。マア頑固に剛情を張られずとも。頑固でも何でも
 拙者の申す事聞るゝがよい。ハイハイ到底あなたの頑
 固には叶ひませぬからあなたの申さるゝ通りに致しま
 しょう。ホ、ホ、まあ怖い顔をして。怖い顔は生れ
 付です。怒られたの。イエ御厚意に向つて何の怒りま
 せう。唯少し眞面目になつた計り。ホ、可愛らしい眞

面目に。ハイ眞面目に。妾しも眞面目に申しませう。
 サア露伴様。何。殿御の仰しやる事さへ言れば女子の
 云ふ事は通らずともよいと思はるゝか。何。御自分の
 御言葉だけを無理やり心に弱い妾しに承知させて妾し
 の眞實には露かいらぬと酷らしうおつしやるか。知ら
 ん。知らんとは御卑怯な。サア此方へござれ御一所に
 臥みませう。妾もあなたの御言葉を言すればあなた
 ぞて妾しの一言を立て下さつたぞて御身體の解くるで
 もあるまい。汚るゝでもござるまいに何故さう堅うなつ
 て四角ばつてばかり居らるゝか。エ、野暮らしいと柔
 らかな手に我手を取りて隨も動かさず平氣に引立んと
 する其美しさ恐ろしさ我膽も凍るばかり凛然として眼
 を睨き唇を咬み切め心の中に「孽徒茫々たり首惡
 色慾に如くは無く塵寰擾々たり犯し易きは惟邪淫な
 り振山蓋世の雄此に坐して身を亡ぼし國を喪ひ。繡口
 錦心の士茲に因りて節を取ら名を墮す。始は一念の差
 たり遂に畢世塵埃莫きを執す何ぞ乃ち淫風日に熾んじ
 して天理淪亡するや當に悲むべく當に懺むべきの行
 を以て反て計を得たりとなし而して衆怒衆賤の事悟と
 して羞るを知らず。淫詞を刊し麗色を談じ。目は道左
 の嬌姿に注ぎ腸は簾中の窈窕に斷ゆ。或は貞節。或

は淑徳。嘉すべく敬すべきを遂に計誘して完行なからしめ。若くは婢女。若くは僕妾。憐むべく憐むべきに竟に勢逼して終身を玷すを致し。既に親族をして羞を含ましめ。猶子孫をして垢を蒙らしむ。總て心昏く氣濁り。賢遠ざかり傍親しむに由る。豈知らんや天地容し難く神人震怒し。或は妻女酬償し。或は子孫受報す。絶嗣の墳墓は好色の佯徒にあらざるなく。妓女の祖家は盡く是れ貪花の渾子なり。富むべき者は王樓に籍を削られ貴かるべき者も金榜に名々除かる若枝徒流大辟。生ては五等の刑に遭ひ地獄餓飢畜生。没しては三途の苦を受く從前の恩愛凡に午つて空々成り。昔日の風流而も今安にか在る。其後悔以て從ふなからんよりは蚤く思ふて犯す勿きに胡ぞ。謹で青年の佳士。黄卷の名流に勸む覺悟の心を發し色魔の障を破らん事を。芙蓉の白面は帶肉の船骸に過ず美麗紅妝乃ち是れ美人の利刃なり。縦ひ花の如く玉の如きの貌に對するも常に姉の如く妹の如くする心を存して未行者は失足を免るべく已行者は後めて早く回頭せよ。更に望む。展轉流通し迷に相化導し必らず自々覺し覺路に歸し人々共に迷津を出でんことを。首惡既に除き高邪自ら消し靈臺滞りなく世榮遠きに垂れん矣」とう

る覺えの文帝遇戀文を唱へける我見地の低さ鄙しさ。其後此美人に罵られける
色仕掛生命危ふき鬼一口と
選てまはりし臆病もの
年は今色の盛り。春の花咲き亂れたる様に美しき婦人と一ツ屋の中に居るさへ。我柳下惠に及ぶべくもあらぬ身の氣味悪し。然しなから何千萬人浮世男の口喧しく我を罵る責むるども。鐵牛角上の蚊ほども思はぬ瘰我慢の強ければこそ此家に止まりて此女とさしむかひに食もたべたれ談話も仕たれ。素より人間の批判取沙汰何とも思はざる我も天道の見る前に山中なればとて見ず知らずの女と同衾する事耻かし。否々同衾する事少しも耻かしからぬにせよ。其柔らかき肌近く。僅に衣服幾重かを隔てゝ身の内の温暖みの互に通ふまで密接合ひて我耽るべきにあらざ。共に寝よどの言葉かけられし又にてさへ身内頗る慄え。我否忽ち草き。我心かきむしらるゝ如く。幾年の修行少しの役にたかず。もだくど上氣して今迷戀の文一通り口の中に唱へたりしまでは思慮分別の湧く間なく。正直の所は胸の中に一點の主意なくなり。婆子燒庵の公案ひねくり

し昔時のやうにはあらざりし。況や此美しき婦人ど咎め手の無きかゝる山奥の庵中に眠らば中々以て。枯木寒岩に憑る三冬暖氣なしといふ工合に意を斂めて寂然と濟まし居らるべしとは思へず。美人今夜若し我に約さば枯湯春老て更に穉を生ぜんとは紫野の大徳一休様さへ白狀されし眞實の所。大俗の我等賢人顔したりとて危い哉。婦女の居ぬ山蔭ならば羅漢と均しく悟り切ても居らるべし。白い驕見ては通を得し仙人でも雲の臺を踏外して落たる話あり。若も八米殿其女も同衾したら多分は底の無い地獄の奥深く墮落せん事必定なり。我今此美しくしく心おしげな女と一つ抱き掛て枕をならべ。仔細なく一夜を明さんとするも脊中合せでは肩寒し山里の夜風透間洩りて一しほ寒ければと我肩に夜着品よく着せ掛て此方お向なされそれでは兩人の間に風が入りてと云はれては愈々むづかし。あの萎やかなる鬢の毛我頬を摩で。花のやうな顔我鼻の先にありては尙々むづかし。玉の腕何處にか置きなん乳首何處にか去らん。扱は愈々大事なり。女猫抱て寐じど同じ心にて我眠らるべきか。叱。若しや夜着の内人の見ぬ所身動きに衣引まくれて肉置程長き女の足先腿後など我毛臍に觸らば是こそ。喝。生死一機に迫る

一大事。素より道力堅固ならず。戒行常は破れ居る凡の我あさましき。心は起さるにもせよ長閑なる夢は結び難し。且此女眞實に人間か狐狸か。先程よりの處置一々合點ゆかず。よしや狐狸にもせよ妖怪にもせよ。人間の形をなし。人間の言葉を交ゆる上は人間と見るは至當。其人間と共に眠らん事人間の道理にあるまじき事なり。人間普通の道理にあるまじき事を恥らふ様子もなく我に逼る女め。妖怪と見るも又至當なり。妖怪に向つて我何をか言はん小人は謹慎の禮を以て來り惡魔は親切の情を以て誘ふ。扱こそござんなれ惡魔め。鐵拳は模糊たる人情を存せず眞向より下して露伴が力量の忍ろしきを知らせ呉れんか。噫それぞ魔は却て梵天を攻めし摩羅修羅の力を持るかも知れず。毛を吹き疵を求め草を打て蛇に會ふは拙き上の拙き事ぞかし。如何に答へん何と爲んアと思ひ付たり昔時は芭蕉も女に袖を捉へられし事あるに彼默然として動かず。女終に去らんとする時芭蕉却つて女に袂を捉へ。こちら向け我も淋しき秋の暮と一句の引導渡せしよし小耳に挟んで聞覚えたり。我又良し。芭蕉をまなで默然たらん計りと漸く一心を決し。胸中には

九想の觀を凝らしながら乾坤を坐斷する勢ひ逞しく元然と坐すれば女はもどかしがりて握りし手を尙強く握しめ。サア露伴様何考へて居らるゝ此方へ〱と引立てる。引れじ〱南無三引れてはと満身力を籠れば此方へ〱サア此方へござんせ。さりとは頑固な御方。山に浮れ水に浮れたまふ氣輕には似ず尻の重さ。戯言云ひ尙引立る。大事々々。此妖魔めに一步を轉ぜられては一步地獄に近づく。齒を噛み切り身を堅くするに。尙悠然と女は引く。引れじと張る力弱くよろ〱と引立られて最早叶はず。ツツと叫びて手を振はらひ逃出せば女追ひ縋りて我袂をどらへ。ホ、と笑ひながら扱は妾を妖怪變化の者かと思はれて夫程までに厭がらるゝなるべし。ホ、ホ、今少し膽太く心強き方ならんと存じての親切仇となり却つてお胸を騒がしたる罪深く。眞誠妾は妖怪變化にもあらず。浮世を捨し身のあさましき慾に迷ふにもあらず。兎にも角にも同衾せんとは強て申さじ。今より夜道あるかせ申さば亭主振り餘りに拙く惱み限りなし。先づ〱坐り玉へと止むるを。我又無下に振り切るも恐ろしく。爐の向ふに坐れば女は鉈取り出して立上るに我又々ヒクリとするを見てホ、と笑ひ草履つゝ掛て戸の外に出で。丁

々々響かする木を切る音。生木なりと燃かんとて薪取りに外へ出しぞと悟れば漸く安堵して我ついで外に出で。焚し木を取り玉ふならば男の事我助力致さんと鉈借り受け。そこらの雜木切り倒して一抱えだけ家の内に投込み。戸口確りと風を遮り對ひ坐れば女は火を掻起して僅に焚し初め頓て漸く焚え立ち暖氣満るを見て。此通り爐に火あり。妾は愈々獨り起居る事つらからねばサア露伴様ゆつくりと御やすみなされ。決して再び不束な妾御一所にとは申さず。ホ、ホ、膽の小さい御客様に可憐御氣をもませ申しましたは妾があやまりました。御心配なしに獨りでおやすみなされませ。イヤ先刻も申せし通りおまへ様おやすみなされ。ホ、ホ、又剛情を張らるゝか。夫ならは御一所にか。夫は御免蒙りたし大俗凡夫の我等おまへ様のやうな美しい方ど一所に寐るは小人罪なし。玉を抱て罪ありの金言まのあたり。ホ、ホ、おなぶりなさるゝな。何の妾が厭なればこそ其様に御逃なさるゝなれ。嫌はれては今更是非もなければ眞實妾の丁見では夜風寒き山中何の御馳走申す風情もなければ。其むかし乳母があなたを抱て寐かして進た時の様にあなたを堅平と抱て妾の懷中で

暖めて進やうばかりの御切。妾も佛菩薩の見玉ふ前に決して淫りがはしき念は露もつにあらず。あなたとて一箇の大丈夫初めて逢て抱て寐た女位に心を動かす様な弱い方ではあるまいと存じたに御卑怯千萬未練の御性根今の御一言御蔵談ならずば玉を抱かざる前も小人は小人なる通り妾も同衾し玉ははずとも既に罪ある助倍の御方。ホ、是は失禮。兎も角もあなた御自由になされ妾は亭主の身で獨り寐る事致し難しといふ。我呆れて明きし口閉ぎ得ず。茫然と此女の言葉聞き。つく／＼考ふるに人の世の毀譽褒貶を心に留めざるのみか。眼前の我をさへ。見て三才の小兄の如く取り扱ひ。然も悠々として胸中別に春ある悟り開けし大智識のやうなるに益々不審晴れず。ハテ何物の子ならん何物の變化ならん。尋常の婦女とは思へず。抑々如何なる履歴ありて斯く可憎しき容貌和しき心持ちながら山中には引籠りけん。當世の小督か佛か祇王か祇女か。それとも全く妖魔かどそぞろ恐ろしく。さらばおまへ様はおまへ様の御自由我等は我らの自由として我は此爐前に一夜明すつもり。妾も爐の前あなたに向ふ坐に一夜明して苦しからず却つて心安し。と斯に一切談しの埒明けば我大きに安堵して穴のあく程女の

の頭上より全體を覗るに一點の疵なき玉のやうにて折から燃ゆる火炎の閃めく陰に隠現する女神。とても其氣高き美しき人間の繪師まだ是に似た者も書きたる例しあらざるべし。荆茨の中に鹿は置きたく無く。鶴は老松の梢にあらせたり。目さしき者尊きもの可愛きもの美しき者皆其所を得させたりは我人の情ならんと思ふ。我あはれ駿馬は勇士に伴なはせたく。名花の園蝴蝶は眠らせたり。或る歳我旅せし時旅宿の下司洒掃除の時懷中より日本政記一冊落せしを見て心掛ありながら空しく人に僕仕居る其男の口惜さ如何ならんと思ふ。涙ぐみたる事ありし。夫にもまして今此女天晴の容貌ひび／＼と深山の谷間にある埋れ木の花も咲かせず朽果る通り切も氣の毒。美人所を得ずして樁火に燵ほり草の屋に終るとはなさけなき天道の爲されか。男見時を得ねば滄海に入ると同じく。既に見識ありて俗情に遠く風流を解して仙境に近づき居る此女。浮世の塵を厭ひて山中に終らん所存か。さりとは又女の癖に男めきたる憎さよ。女の女らしからざる男の男らしからざる。共に天然の道に背きて醜き事の頂上なり。さりながら女の女らしからずして神らしき。男の男らしからずして神らしきは共に尊き頂上ぞかし。今此女の

言ふ所最早女らしからず。女の口より初めて逢ひし我を抱て寐んなど中々以て言へた事ならざるに。然も乳母が幼稚りし我を抱て寐し如く我を抱て寐んと云ひし事若し虚誕ならずば此女は女の男めきたるならで神らしき方に近づきたる方外の女なり。然し我凡夫の眼より見れば此女も斯く尊と氣ならんより。其き配偶を得て市井の間に美しき一家を爲したらんこそ望ましけれと思ふまに。又囑れば。端然とせし御有様愈々凡界の女の。戀に病み衣服に苦勞し珊瑚の根掛の玳瑁の櫛のど慾にざわつく儔にあらず。御眼の中の清しきは紛紜たる世事を御胸の中に留め玉はざるをあらはし御顔色のあざやかに艶々しき。充分今の境界に満足して何の苦しく覺さるゝ事なきを示して。且は御口元の締りたるにぞ理非を判め玉ふ智慧敏く居玉ふを知られける不思議不思議。

餘りの不思議に堪えかねて我いと叮嚀に眞實を籠て言葉緩く。先程も伺ひたれど歳若きあまへ様に尼にもあらで山の籠り。如何にも不思議に存じらるゝも。一ツは美しき御容貌和しき御心根持玉ひながら無慘や。猪狼の跡多き地所に潜み玉ふを慨かはしく存ずるよりなり。斯く山住し玉ふ其譯苦しからずば一通り御聞せ

下されたとしと問へば女ホ、と笑ひながら。此頃うるさく世間に流行どか聞し小説にでも書玉はん御了見か。よし小説には書かざるにもせよ話しの土産と都の人に賣らし歸らん御了見なるべし。恥かしき身の上明て云ふ迄もなけれど。若し人ありて妾の身の上話を聞き一點あはれと思ふ人あらば嬉しき事の限りなり。いで恥を忘れて恥かしき身の上語り申すべし。縁外の縁に引されて或は泣き或は笑ひし夫も昔の夢の跡。懺悔は戀の終りと悟りて今は何をか匿し申すべきと云ひつゝ櫓を添たりけり

聞けば聞く程筋のわからぬ

戀路のはじめと悟りの終り

其時妙は長江を渡る風輕く雲を吹ておぼろにかすむ春の夜の月大空に漂よふ様に満面の神彩生々然も柔しや。藍田を罩むる靄あたゝかに草を蒸してほやりほやりと光り和らぐ玉に陽炎立つ如く兩眼の流光ちらちらと且つ嬉し氣に。聞て玉はれ露伴様。妾し幼少より東京に生つて父母まづしからず。家計ゆたかなるにまかせて。露を銀薄の頭簪に何ぞと問ひし頃蝶と愛られ。風を空色縮緬の振袖に厭ひし頃は花といつくしま

れ。浮世に樂み長閑なりし年立ち年暮て冬を送り春を
迎ふる度毎。買つて貰ふ羽子板と共に背丈段々ど大き
うなりしが十四の秋父様圖らず卒れ玉ひしより悲しさ
遣る方なく。芝居見る外には泣たるためし少なき身も
ひたすらに涙もろくなり。果敢なき野邊に一條の煙り
を觀じて後は三度の御膳に向ふたびに。父上の平常坐
り玉ひし所むなしく明きて完全たる前齒の一本抜けた
る如く。しよんぼりと母様ばかり心淋しく。箸持つ力
も衰へ玉ひたるやうに召上りながら。我が母様を見て
悲しむと同じく母様も我を顧み玉ひて。御胸痞えたる
や御飯の量少なく白濁のみいたづらに飲して私かに喰
の潤ひさし玉ふに我口中の者の味いつしか消えて與齒
咬みしめしなりに開く事難かりし。われそれより自然
と垂籠り勝に日を費やし。平素好きなる三昧の色糸彈
き鳴さんともせず。琴の師匠にも忌中に休課たるま
遠ざかりて。母様が持玉ひし草紙くさくさに馴れ泥み
有る事無き事かきつらぬたる冊子の中に幽なる樂みを
なせしが。終に癖となりて彼は見盡せし後は薄雪住吉
伊勢竹取或は求め或は借りて三年の中に解らぬながら
源氏狹衣にまで讀み至り。其間つくく人情の濃き薄
きを考へ世の態の眞實虛妄を覺え。むかしより男とい

ふ者のあさましく。意一時なさけ一時。思ひ込強けれ
ど辛防弱く。逢ふを悦べど別れを悲しまず。媚めか
しく佞らへるをかしき女を好み。戀を榮華のわざくれ
三昧。犬猫の色美しき愛る様に女の髪容よき愛る
者なるをさどり。我縁もなき男なれど源氏業平の如き
戯け者を憎く思ふ事深く。嫉妬するにもあらねど其戯
け者に迷ひ焦れし色々の女どもを齒痒き馬鹿と心の中
に思ひけるが。十八の年母様もまた老の病危ふくなり
玉ひ。兄弟もなき身の氣弱く朝に晩に腹中は泣ながら
神佛を頼み御介抱申せし甲斐なく。我亡き後は是を見
て一生の身の程を知れと行水に散り浮く花を青貝摺り
せし黒漆の小箱を與へられしまゝの御往生。悲しども
つらしども言ふ言葉を知らぬ歎き。漸く御葬式済して
後。彼小箱を開き見れば何時の間に認め置れしやら一
通の御書置。是ほどまでに我を可愛う思ひめされしめ
りがたさと先づ涙とぼれながら讀み見れば。噫其時の
心持今思ひ出しては慄然とする程。恐し口惜さ悲し
き情無き味氣無き胸患さあさましき心細さ。厭といふ
厭な心持一時に込上て氷水全身に打かけられたる如く
又猛火に眉毛焼かるゝ如く冷汗脇の下に湧きて身ふる
ひ止め得ず。氣も暗く眼も暗くゆら／＼とゆら／＼玉緒

絶果んばかりなりしが。夫より愈々浮世を厭ひて。イヤ御話しの中途ですが其黒塗の小箱の中の文に記しありし事如何なればそれほどまで以前様を驚ろかせしかマア御聞なされ其文に。記しありし事をわたくしの口から申すもつらし。初も我年は十九の春を迎へて空に更行ば親類のやうに親達と交際し誰彼。我を嫁にせん我婿を世話せんとといひ来るを早くもあさましき人情の詐り。盛りは十年の色。用は一時の財貨にひかれての申し込と猜して。一々きびしく家の僕に謝絶せ。ひたすら母を慕ひまゐらせ。あはれ此身の朽よかし靈魂のみとなりて母様の御傍近く行かんものぞあせり。つくづく生命も惜からず。世間に何の樂みなく。讀耽りし數々の草紙も打すて。又見ず。男と面を合すさへ忌み嫌ふ様になりて。蓮葉なる下女共が年若く美しき俳優なぞの噂まで苦々しく覺えければ。自然と自分は髪に油の香も止めず櫛の齒を入れて鬢の恰好氣にするまでもなし。ましてや前差の籠甲の斑の詮議根掛に鹿の子の色の上しあしなんど問ひもせず質しもせず。紅脂白粉はまるで忘れつ。帯に苦勞をせしはむかし下駄に鼻緒を苦勞せしもむかし。羽織の色がどうであらうと着物を取合せどうであらうと一切女のたしなみを捨て。お

もしろからぬ心中常に涙を湛えて天地も薄黒く見え花は咲ても惹きたる我。鳥は歌ふても黙然たる我。皎々と澄む月に對つても濁り水の我には影清く宿らず。陰濛々と寐て起て食ふて少しも何の業なさず。身をじだらくの吾儘にまかし。神を恨み佛を恨み人を恨み天地を恨み佛を恨み苦しむ一念増長するばかり遂には神をやりたきまで心逼り來りて。道理を見れば何の燈心の繩張り。道理も更に恐ろしからず。人情を察れば高が氷柱に彩色の一時。人情も夢うれしからず。胸中に霜雪寒く残つて慘らしき觀念絶ゆる間もなくありしが或日の事。立派なる臘塗人車我家の門に付きて髯うるはしき官員風の男案内を請ふに名刺を見れば何某局長奏任一等の御方當世の利物と評判ある人なれば我後見ともなりて家事萬端取り賄なひし老僕出で御用の筋を何ぞと承たまはるに。唐突の參上甚だ失禮なれど傳手の無きまゝ是非なく直に申し入れます。付ぬ事を御聞申すが當家の御主人御年頃なるに未だ何方とも縁談の御約束なきや。實は拙者舊藩士の若殿見ね戀にあくがれ玉ひて是非に所望いたされ居る譯。と申した計りにては御分りあるまじきが今年の春若殿郊外

を散歩せられし折或る墓地を通りかゝられ。不圖乞食共の話しを聞れば。今歸つたあの娘。器量美しい計りか孝心のいぢらしさ見えて母親の墓の前に蹲りたるまゝ動き得ず。涙は雨の絶ざる程泣く。若い身にも似ず。生命惜からねば早く母様の御傍に行たしとの述懐。何と今時珍らしい氣立の女ではないか。一入が云ふを又一人がひつとて。貴様今日初て彼娘に氣が付たかあれは毎月の事。去年の何月なりしか彼娘の母の此處に葬られてから毎月の命日怠る事なく此處に来てあの通りの悲歎。此所で見ても可愛想なかりさま。殊更今日などは顔も大分瘦せて血色も悪し大方家に居ても始終泣てばかり居る事であらうかとの噂。耳に入るより若殿ゾツとし玉ひて誘はれし涙か一滴。是ぞ戀の水と思ひの泉。ゆめ。浮たる御心にあらず戀が爲せる探索其後御名前御注所まで何時の間に聞き知り玉ひます。焦れて遂に父上の許しを乞はれ父君の御依頼によりて兎も角も拙者中にたち周旋の勞を取るべく今日態々参上したり。内々承まれば未だ何方とも御縁談きまりたるにもあらぬよし。何と此話し能く能御考へ下さるまいか。媒人口たしくではなけれど拙者舊藩主の御嫡子。爵位財産は世間の汰沙でも御存じ

なるべし。殊に先年獨乙國に留學せられて學位まである若殿。華族間にて行末望みのある方。全く浮たる戯れ言大名氣質の我儘なる縁談申し入るゝにあらず。民同等の今日實以て後々は侯爵夫人と我等もあがめ申すべき所存。戀のはじまりの次第を考えられても成べくは色よきお返事を玉はりたしとて歸りたる後。老僕は躍り上りて喜び。平常皺びたる顔の其時は光りをなし我に向ひて縁組承知せよと説すゝむるに。我一度はやんごとなき人に戀れたりと聞てカツと上氣し。又一度は是も男の例の一時の熱やがては褪める色好みの心鄙しと蔑視み。又一度は母の遺書思ひ出して忽に身ふるひ生じ。厭々々々。縁談など聞く耳もたずと強く云へば老僕は驚き。是ほど結構な縁談いやといはるゝは片腹痛しと理をせめ言葉盡して我を諫むれど少しも動かねば是非なく謝絶申して。情知らぬ者ども薩言さるゝを厭はざりし。されども我其時より何とし心いつしか和らぎて髪かたちをも治むるやうになりしが。三月ほど経て又彼何某局長見えられ。我後見に向ひて。過し日の話し纏まらぬ以來流石活潑に聰明に渡らせ玉ひし若殿御動靜がラリと變り玉ひ外出もし

玉は書見もし玉はす。花にも月にも嗟嘆の御聲ばかり。望みは絶し此世に絶ぬ玉の緒のあるは悲しき事の限りぞ。あるに甲斐なき生命誰が爲にかながらへんなどいふ玉ひて次第々々に三度の御食すゝまず。晝はうどく眠り玉ひて夜は寐難に輾轉玉ふ。あはれとは是なりと思ひて御付の者慰さめまゐらせ。愚とはそれなりとさとして父君叱り玉へど唯々消えなば消えぬべし露の身の散りなば人のあはれとや見ん。つれなき人はつれなからでうとまれし我こそうとまし。とくく捨ばや生命と朝夕の獨り言。聞れて母君の堪え玉はず再度拙者を召して此御使ひ。何卒よろしく御推諒ありて。御不足の廉あらば御遠慮なく申さるべし。御指揮に随ひ申すべければ此戀成就する様と情を盡し道理を責めての話し。其時我ふすま越しに聞て思はず泣しが老僕が我に向ひて返事相談する時には又彼母上が殘し玉ひし書置の事思ひ出して唯々つれなく。縁を結ぶは厭なりと云ひ切つて數多の人に憎まれぬるを關はざりし。此度は最早思ひ切て來るまじと思ひしに又一月ほどたち。彼人來りて若殿終に浮世をあぢきなく思はれしあまりうつらくと病ひの床に打臥され其後枕上らず。療治の詮方もなく父君母君今は共に最愛の御嫡

子に引されて心よわく。共に御心配のありさま餘所に見るさへ痛まし。願はくは思ひ返してよき返事きかせ玉ふやうどりなし玉はれ。是は若殿御病床の中にて書捨られし反故ながら戀の切なる事あらはれて隠れず。せめては是をだに見せまゐらせて少しはあはれを汲まるとよりともなれかしと持て参りしなり。又是は若殿いまだ御病氣になり玉はざりし前の寫眞なるが是も併せてまゐらすべし。御返事は明日また伺ひに上るべし。且は又其折御返事は如何にもあれ。若殿が生命かけてまで焦れし方の寫眞一枚玉はりたしと云殘して歸りければ老僕又我に色々説諭し。是非に此縁結ばれよ。淺からぬ因縁なるべしなど泣て勸むれど我剛情に承知せねば少しは怒りて立去しあとに残せし寫眞。見るに氣高く美しき御顔はせ。いとしまも生じたるばかりか短冊に筆も歩み。健ならずして燈火も暗うなりゆく夜半の床に。こゝろきえ。君をしぞ思ふと調々覺束なく記されたるを見て吾魂魄もゆらくどなりしが母君の遺書思ひ出して又かゝる貴人に近づくべきにもあらずと翌日も酷く返事させ寫眞も送らず。かくて十日程過て吾夜の門に慌たしく車を寄せて彼

官員轉が如く走せ入り眼付さへ常とは變りて涙ぐみな
がらつれなき此所の戀れ人め。今日は是非々々兎角の
返事に及ばず邸第まで來られ若殿生命今宵を過さず
と醫師の鑑定。父君母君我等までの歎き察しても玉は
殊に今朝若殿の口ずさまれし一首

厭はれし身はうきものと知りながら

尙捨てがき……

と後の一句を残して血を吐かれし御ありさま。肺病も
つまりは戀故よしや女は兎なりと箇程まで思はれてま
だつらく當るべきやと半分は恨み半分は怒りて我を引
立行んとするに。我は又身を切らるゝより切なけれど
愈々剛情に行かじといふ折しも亦車の音して御付の人
を後になし。容儀繕ろひ玉ふこともなく馳せ入られし
上品の夫人。氣も半亂に。お妙さまとはあなたか。我
子が今臨終の際。一目おまへ様を見たとし利かぬ舌を
無理に動かしての望み。此通り手を合はして願ひます
是非に來てと侯爵夫人ともいはるる尊き人に拜まれ
て。心は洪水に漂よはされたるごとく。うろくする
を無理に引立られ。車の上も夢路をたどるやうにて立
派なる御邸の中に入れば人々聲を限りに呼ぶ響き。早
や切々と悲み泣く女の聲も聞ゆるに。夫人は慌て、幾

間か通り過玉へば我も煙にまかれ其跡に跟て病室に入
りける。見るに瘦枯れ玉ひたる御ありさま今とりつめ
て危かりしを呼び生られて母君の顔見玉ひさめくど
泣かるゝ痛はしき是も誰故。我故と思へば勿體なく消
も入りたきを夫人は押出されて若殿の御側近く参り。
我を忘れて涙つゝみ切れず御手を取りしまし何の理由
とは知らず泣伏せば若殿も涙ながら我を見玉ひて御言
葉はなく。握られし手に微弱き力を籠めて我身に幽玄
なる働きを與へられたり。其儘我は絶えて夢の如くな
りしが其後呼生されたれど若殿は遂に蘇生らせ玉は
ず。我は身も世にあられず立歸りてより後其人をのみ
思ひてなまじるに生残りしを口惜く。ますす天地を
恨み憤りて狂亂となり。七日の夜獨り吾家の持佛の前
に看經したる時朦朧とあらはれ玉ひし御姿のあとを慕
て脱出で。何處ともしらず迷ひあるく眼には幻影をの
み見て實在の物を見ず。あさましく狂ふて此山中に我
しらず來りしが圖らず道徳高き法師に遇ひ奉り一念
發起して。坐禪の庵を此處に引むすびしばかり。溪の
水嵩増して春を知り峯の木の葉の酈つて冬を悟る住
居。閑寂の中に群妙を觀じて頭を廻らし浮世を見れば
皆おもしろき人さま。慘酷りし昔時の胸の氷碎け

て東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身もあもしろ
く。佛も可愛く凡夫も可愛くお前様も眞に可愛し。天
地に一つも憎きものなく樹の間に集くふ鳥も可愛く土
に穴する狐も可愛し。心華開發して十方世界盡くしく
あもしろき唯識の妙理味ひ更に濃く。泥水相分れて清
淨に澄めば天上の月宿る瓔珞經のおもむきを甞て愈々
面白し。我をあはれど人が云ふもあもしろく我を厭よ
といふもをかし。お前様を可愛と思ひたればこそ抱て
寝てといひしに厭がられしは愈々をかし。昔時は我死
ぬほど人に戀はれてもつらくあたり今は我死ぬほど人
に厭がられても可愛し。一心の變化同じ天地を恨みも
し樂みもするこそをかしけれど長々しく語りつくせど
更に我其故を悟らず。もしくお妙さま其話しの中の
骨となりし行水に散り浮く花の青貝摺せし黒塗の小箱
の中の書置は何事なりしか。其を聞かでは話し分らず。
ハテ野暮らしい其を聞くやうでは貴君もまだ人情しら
ず。其書置讀で後慘くなりしといへば云はずと知れし
事。世を捨てよといふ教訓。浮世を捨ねばならぬ譯を
かきしるせしに極つた事。怪しからぬ事浮世を捨ねば
ならぬ譯なし。イヤく妾等一類の人間是非とも浮世
を捨ねばならず。浮世を捨ねば安心の道あほづかなし。

さればこそ初は神をも佛をも恨みし也。扱も分らぬ話
し。イエく能く分つた話し深山の中にたれ死せず
ばならぬ妾等の身の上。浮世の人は眼くらく種々のあ
はれを悟りながら。情なき妾等の身の上には月日も全
く暗く花鳥も全くあもしろからぬを知らず。されば彼
若殿に我身を早く任せざりしも若殿の子孫をして我如
くあさましからしめざらんとの眞實の心其時の苦しさを
推量したまへと沈みたる調子に答へながら又急に語氣
を變て。ホ、ホ、あもしろからぬ長話し最早やめに致
しませう。言もうるさく語るも盡じ戀と恨みは隣り同
志。これまでくこれまでなりや縁言もと云さして又
楮を添ゆる容貌の美麗さ。水晶屈原の醒たる色ならで
珊瑚淵明の酔るがごときありさまなり。頼て又かすか
に我を見て。あら本意なき夜の短ふて可憐明放れなば
假初ながらの縁も是まで。君は片科川に浮く花。香に
急流に伴つて十里を飛ぶ過やかに。我は其川の岸に立
つ柳。影は水底に沈むで一步を動き難し。逢ての喜び
離のつらさ戯けし戀の後朝ばかりにはあらずといふ
時しもあれ朝日紅々とさし登りて家も人も雲霧と消
え。枯れ残りたる去歳の蒼薄の中に雪沓の紐續きかけ
しまゝ我たゞ一人にして足下に白髑髏一つ

さて昨夜は法外の想像を野宿の伽として面白かりし。假令言葉は無くとも吾伽を爲せし體故にこそ淋しからざりし。是も亦有縁の亡者。形ちの小さきは必らず女なるべし。女の身にて此處にのたれ死吊ふ人さへ無きはあはれ深しと其體を埋め納め。合掌して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。お蔭さまで昨夜は面白うござりましたと禮をのべ。段々川邊を下り小川村に來り温泉宿に入りて此山奥に入りしと出て來ざりし人なかりしやと問へば亭主けいん顔して暫く考へ。不思議の事を問はるゝものかな。オ、去年の事なりしが乞食の女あさましく狂ひて山深くの方へ入りし事ありしが日光の方へは行ざりしよし。何所へ行しかと今に其噂あり。それを尋ねらるゝかと云ふにそれ。其女の様子知るだけ詳しく語れと通れば老父苦い顔して我をチロチロ見ながら。年は大凡二十七八何處の者ども分らず色目も見ぬほど汚れ垢付たる襦袢を纏む。破れ笠を負ひ掛け足には履物もなく竹の杖によわ／＼とすがり談すさへ忌はしきありさま總身の色薄黒赤く。處々に紫がゝりて怪しく光りあり。手足の指生姜の根のやうに屈みて筋もなきまで膨れ。殊更左の足の指は僅に三本だけ残り其一本の太さ常の人の二本ぶ

りありて其續きむつくりと甲までふくだみ。右の足は拇指の失し痕がすかに見え。右の手の小指骨もなき如く柔らかそうに縮みながら水を持て氣味あしく大きな蠶のやうなり。左の手は指あらかた落て拳頭づんぐりと丸く。顔は愈々恐ろしく銅の獅子半ば熔ろけたるに似て眉の毛盡く脱け顔一體に凸く張り出して處處凹みたる穴あり。其穴の所の色は褪めたる紫の上を帯て鼠色に牡蠣の腐りて流るゝ如き膿汁ダク／＼と溢れ。其膿汁に掩はれぬ所は赤子の舌の如き紅き肉酷らしく露はれ。鼻柱欠け落て其處にも膿汁をまたゝか湛え。上唇どろけ去りて粗なる齒の黄ばみたると瘦せ白みたる齒齦と互に照り合ひてすさまじく暴露れ。口の右の方段々と爛れ流れたるより頬の半まで引さげて奥齒人を覗まゆる様に見え透き。髪の毛都て亡ければ朱塗の賓禮盧幾年か擦り摩られて滅りたる如き妙に光りを放ち。今にも潰え破れんとする熟柿の如く艶やかなるそれさへ見るにいぶせきに右の眼腐り捨てて是にも膿汁尙乾かず。左の眼の下瞼まくれて血の筋ありありと紅く見ゆる程裏がへり。白眼黄色く灰色に曇り黒眼は薄霽色にどんよりとして眼球なかは飛び出で。

人をも神をも佛をも逆目に睨む瞳子急には動かさず時
時ホツとつく息に満腔の毒を吐くかど覺えて犬も鳥も
逃避ける。まして人間の一目見るより胸あしくなり。
其あしき臭を飯食ふ折に思ひ出しては味噌汁を甘くは
吸ひ得ず。膿汁。思ひ出しては珍重せし鹽辛を捨ける。
されば誰も彼も握り飯與ふるだけの慈悲もせず其女の
爲すまゝに任せしに彼呂律たしかならぬ歌のやうなる
者あはれに唸るを聞けば世に捨られて世を捨てて叱々
と覺束なく細々と繰り返しては息だはいしく。ハツタと
空を睨みて竹杖ふりあげ道傍の石とも云はず樹とも云
はず打たゝきては狂まわり。狂ひ躍ては打たゝき臍患
の炎に心を燒き。狂ひ狂ひて行方まれず (完)

縁外縁の後に記す

莊子が記せし髑體は太平樂をぬかせば韓湘が歎ぜし髑
體は端唄に歌はれけるそれは可笑きに。小町のまやれ
かうべは眼の療治を公家様に頼み天狗の骸骨は鼻で奇
人の鑑定に逢ひたる星も洒落たり。我一夜の伽にせし
髑體はおかしからず洒落ず。無理におかしく洒落させ
て不幸者を相手に獨り茶番。どこにもかくにも枯骨に向
つて劔欄を撫する嘲りはまぬかれざるべし。

毒朱唇

浮世をすねた山中のさる者。

色氣なき大年増の戀ものがたり。

聞いて給はれ。雲どの岩殿水殿人間殿。

上州に名高き三山の第一と呼ばれたる赤城の景色。殊

更勝れた所は瀧澤の不動様ある邊なり。十丈あま

りの瀧の音絶えず。溪川白く泡立ちて石を轉ばし流す

勢ほひ。都の人に見せたまは是ればかりならず。大通

龍の命とやらんを崇めし巖の鐵鎖あらざり難き峻

しさ。御嶽鎮座の岩も其如く。小通龍は尙恐しく藤蔓

に纏はれし趣き中々面白し。國定忠次が隠れ潜みしと

いふ洞穴の奥深きも物凄き一つなるに。斯る所を何と

見てか溪川のほとりに何時の頃より移り住みけん。樵

夫の妻にもあらぬ二十五六の女居りけり。小夜の寐覺

に狼の聲を氣味悪く思はぬか。扱も不思議と折ふし

不動へまゐる人の尋ね寄れば。何のく氣味わるき者

は都に多しといふ。何とて山中に良い器量持ちながら

暮さるゝと問へば。戀の答へ。誰をと聞けば。釋

迦さまを。途轍ない挨拶して横を向き。白雲打ち眺

め長々しく息を吹き願はくば一斗の酒を得て。有縁の

山水草木禽獸蟲魚人間に我が戀の恍惚聞かせて呉れんと獨り言せらるゝ眼付きりゝしく。鼻筋通て。色淺黒く。油の香なき髪ぐるゝどまきておれつた結に束ね。大綱のどてら引かけたる風情。どうも云へぬ仇な所ありて然も異體なるには。取つて掛る戯れ男なく。無氣味の女と言ひ囃して其噂前橋の町に蔓衍れば。或る飄輕の男少しの才學に誇りし者。それは面白し。我に出逢ひて談り合ひ。若し氣に入らば引出して妻とせん。左様の女ならでは我が細君となすには足るまじ。兎も角も無益にしたからが一斗の損ど。五升宛を馬の兩脇に付け。身も其に乗りて六里の道を苦勞とせず。晝頃行き着き。案内申すまでなく忽ち爐の傍に座りて持せし酒を進め出せば。女苦笑ひして小利口な男め。我を黽つて遊ぶ氣か。片腹痛し。眞に我が戀の由來聞きたくば中途に逃るな。何にせよ是は御馳走かたじけなしど。飲むは。飲むは。飲んで。亂れず。諸膝崩れざりしが。一時ばかりに一斗滴水も残さぬ手際。流石の男驚きけるをじろりと睨みて。はゝと笑ひしより頬の色美しくなりまさり。臉に紅さして來りけるこそおかしけれ。

男此跡を見すまし。御前様戀の仔細世に珍らしくお釋

迦嚨を相手になさるは何故か。少し伺ひたしと詰寄るを打消し。はて無粹なお方や。世の中に心の美くしう洒落れたは歌人ど極つてある事。歌人に惚れぬ女は人形喰ひとて是雌犬同様。我は自然と佛一代の御所行聞きおぼえて。扱も世界の大歌人。天晴美しい方様。たのもしい男。粹なお人實のあるお方。今若しござらば少し甘えても見たく。可愛がられても見たい殿御と思ひそめたが無理でござんすか。やれゝ變なおのろけ少しも分らず。釋迦といふは大の嘘つき。小説の苗賣り。其を買つて收穫をした利口者が貫中馬琴をはじめ。唐土日本の昔し的小説家と我は思て居ますに。我等友達の洋服男は大「フクロソファ」でげすの。珠數かけた男はありがたい宗教家でござるの。如意ひねくる男は打ち殺して狎にやらうのと。鉦々勝手云ひ草。おまへ様のやうに佛は大歌人など云はれたら。馬鹿も年數の功を積んで。妄想を捏着けた痔持の坐禪家や。不立文字と唱へながら不立公案と氣が注かぬ似非居士輩が怒らうも知ず。無門關一冊位を大事に秘藏して。乙にねぢれた言葉は放つ儕輩は。芥子よりちひさい眼で。達磨の眼睛すべて會せず。尋常呼びなす一聯の詩なぞと撒散した中峰の法螺をさがし出して。得

意顔に威張るでござらうが。夫等はどうせ庵中に濁酒を満して醍醐を容れぬ阿呆。未來永々到底あやまちを改むる事のできぬ者なれば。あまへ様の戀の譯もわからぬはあたりまへながら。舟を虚うしして以て人を待たうとして居る我にもしても。只今だけでは何やらわからず。最う少し濃やかに。御道埋へ。能くまあ今迄あなたがお耳に挟んで居らつたやう。昔しよりのつまらぬ坊主や。又は赤鬚連が己が田へ引く水懸口説をさらりつと投捨て御聞きなされ。秘事は睫毛とやら眞實のおもしろ味は茶をのみ飯を食ふ間にも行なはれてあれば直に分ります。さあ此處でござんす。耻を捨て妾しの心意氣を無暗と曉語りませうに。笑ふて下さるな。中途で寐たりなぞなさと天窓から反吐はきかけますぞ。扱お釋迦様といふ可愛い殿御は。あなたも御存知の通り天竺の國王の息子。日本の高天が原長屋に住む連中の噂では。大名主位の者の物領の甚六だとの悪口。なんの詰らぬ穿鑿商人あがりでもマホメットは豪傑。厩の中で生聲あげられたとて神の子なら。秣の臭みが移つても居まい。よしや我折れ。其親は大名主であらうが牢名主であらうが其の子は生れついで胎毒も少ない象あもしろく。まくりも能う飲んだやら胎毒も少ない

く。清々しく生長た様子にて。乳の呑み過しから臆病も起さなかつたさうなれば。自然と出来のよい人間並に智慧も日に増し發けて來たであらうと思はれますに。やれ三年三月と何日何時胎内に居られたの。横つ腹を蹴破つて躍り出したの。母もない冗談それで縁の下に飛次込め血塊の妖物。評判よく木戸錢は見えて御戻り。おほし是はまあ輕機な。私とした事が圖に乗て横道へはいりました。それから段々大きうなられて。人間は死ぬ者だと云ふ事を初めて心注がれた時。さりとは果敢ない者ぢや。死んで花實が咲くものかと。小聲で唸れもなされざりし。あゝ死んで行く人が。お膝の上に抱かれた事もあつたお父さんやお母さん。別れ。馴れなじんだ女房可愛い子にも別れ。一つ酒盞で獻酬して睦ましく語らひ合つた友達にも別れ。一生の心にも我を戀しと思へばこそ。出遣入毎に尻尾をふつてふんぐと鼻を擦りつける可愛らしいあの黒斑の分れ。半分は我が代理をして下女の唾りを毎朝起したあの鵝にも別れ。折角苦勞して拵へた家藏。丹誠した庭池。萬年青の鉢植。根上り松にも別れ。我が足音を知つて浮み出る緋鯉龜の子にも別れ。我がばかりの好みの衣裳にも別れ。蕨敷に一すゝ入れても

それ寶丹。小石に躓づいて擦り疵出來たにもそれ即効
紙と騒ぐ程大切にしたる自分の親より子より女房より
内々は最惜しう思ふて居た自分の身體にさへ別れて。
化し野の空に飛び上るか。黄泉の流れに浮き沈むか知
れぬ眞黒々の中に行きとも無いながら行かねばならぬ
悲しさ。今朝結ふた計りの天神鬚。鞠ついて遊ぶにも
散けるを厭ひける美し盛りの小娘が。其髪のはらりと
なるにも構はずがつくりと。泣き伏して。切々と動氣
烈しく。父様のうと冷えかゝる左の手につかまりて
呼ぶに。いとしの者や汝を置いて父は何處へ行かれう
かと思ひ迷ひ。あいと一言返辭して。安堵さしてやり
たけれども。舌の強りて意にまかせぬつらさ。長の年
連添ふて一厘の隔なく契り交し。私は龜吉あ前はあ
鶴。共に千代まで八千代まで。替らぬ離れぬ。地雷火
が今起つても噴火が二人の隙の間燃え出しても。
退かぬは退かぬは神文くつされと惚れ合つた女房は。
惣身の肉めきくと剥るゝまで慄へながら。我が胸を
ゆすぶり。取りみだして節糸の小袖ばりゝと口に
噛み裂き。衣を着きざりにして何處へ去れるとの恨み。
あい可愛い貞節者。おのれその顔を見納めにと。眼は
方一杯に開いても見えぬ切なさ。御隠居様は平常痰持

の咽苦しげに。ぜり／＼した聲を御借しみなく。精限
りに息子やツと耳につき給ひて。物髪の白髪を我が枕
邊に浪立たせられ。情無や世盛りの男をほつ／＼何た
る逆さ事ぞ。ほッ年老いし我は死なでえい阿彌陀さま。
我を息子の代りに引取つて下さらば。死別れも却つて
嬉しからうものを。ほッ／＼。代つて死たい。ごほん
／＼と暖入れられながら。先立つ不孝の者の面に涙がせ
給ふ熱鐵の一涙。あり難き満身の鑽りもみする様に浸
み透り。あゝ今まで何十年お世話焼かせた許りに孝行
らしい事は肩一つ揉んであげるだけの業もせず。剩さ
へいつぞや吾が子を叱り給ひしを見たる時は口には出
さ／＼りしなれど。此老耄の死損ひめと。勿體なくも腹
立ちし程の此々々不孝者にも御いつくしみ深く。御老
體の殘年榮養なされて幾程ぞ。それを尚も短くなさ
れて我に代らんとの喩へ難き廣大の御慈悲。今爰に不
孝の廉々ありたけ攫み出して懺悔なし。計すぞと御一
言きいて安く終りたけれど。叱。後れたり。せめては
御手をばかりもいたいて彼世に行きたきに。無念。
それも叶はず。三歳になる男の子。おのれは父に以て
呉れるな。あッ。おのれは不幸でないか。あッ。父の
死ぬにやさしくも泣いて呉れるか。あゝ罪もない者に

悲しみを知らずる悲しさ。ひイツといふ高啼の聲ばかり聞えて居ながら。次第々々薄霧の立籠る様に。舟に乗つて岸を遠ざかる様に。朦朧寂寞となり終りて。後はこうツと鳴る大木の梢吹く風の餘りに率塔婆を吊らひ。結れく泣く蟲の音が變化の少ない音楽を耳のしない石塔の前に奏るばかり。是ぞ人間のほとけのつまり。工侯將相士農工商。遊女も哲學者も穢多も婆羅門も。御氣の毒ながらあなたでも玄でも同じ事なれば。其處でも釋迦も子供らしい觀念ではあつたらうが。ぞつとなされて發心なされたと云ふ話し。然し最負の引倒し連中の申す様な。此發心がなんのかんのと申す譯ではなく。妾が丁見では高が物の哀れを知られた分の事。理窟も講釋も有つた者ではなし。もしく寐てはいけませぬ寐ると打ちますよ。はいく寐はしませぬ。されど學問は齡と共に進み。浮世の有様も次第々々能く分つては外れど。瞬さい時強く感じた事は中々忘れぬ者。いや死ぬまで忘れられぬ者なれば。兎も角もお釋迦様ほどの豪傑が烈しく確かりと膠漿の底に印された事。一朝一夕に消え去るべき苦なれば。却つて學問經驗の増すに従ふて其情の深く大さうなりまざるは當然の事。昔しから物語にある男女が一度思ひ染めて

は一人の外に三千世界の男も女もない様に思ふて。華奢な姿に意氣な粹の他にあらぬではなけれど。眼につく者皆最初に惚れた人に焦るゝ種となるばかりなるど丁度同じ道理。されば彼方の島田嶺にも迷ひ。此方の達摩返しにも迷ふ様では。戀も凡人さもしき境界をか。し。お釋迦様とて春心つく頃。仇な首締の琵琶に天竺の二上り。まかからきんの「あほだらやあべんぴん」どか何と。おほ。まさかそんな歌もありますまいが。洒落た文句で浮かしたてられ。舞ふや乙女の雪の袖。緋縮緬の蹴出しびらりばツとした遊興鴻宴なんどに。見事々々と聲かけさせらるゝ様に浮世まざれし給ひては。假令聰明でも。詰り隣りの國に打入り。結構な如達を分抽致されて塵の塵を拂はさるゝ位の汚き業で八十年に終られたらんに。流石は鳳凰群鷄と食を争はず。一途に高尚の想像に耽られ。色作りて磨き立て。御意に叶はんと苦勞せらるゝ御后妃憎うはあばしめさねど。可愛想に是も臨終の今夜来るも知られぬ顔に。可憐眉柳毛の幾擦ぞとあはれみ給ふ心御胸の中に絶えねば。蘭の睦言もどんちんかんで合挺うまく合はず。愛惜の大小に一身の周圍を照らす一時の提灯と。天下の萬年を照らすお月様ほどの差別あれば。耶輸陀

羅御前はもどかしく。これ太子様ちツとは打解けてお話しなされてもよさそうなものを。いつもく物案じのお顔付別に打解けぬ譯はなけれど。いとしいなたの死ぬ時はどんなにあらうと。其美しい顔見るたびにあはれを催してならぬ。あれいやな事仰しやらずとも妾をいとしと覺しめして下さるならば。涙々として面白う話し下され。左程おもしろい話でもない。ゑゝ意地悪な。それ御覽なされ今蟲が燈火を取りて参りました。蟲は火故に憂き身を焦す。私は君故焦れ候ふといふ古い唄は丁度私を詠んだやうの者でござんす。あの蟲あはれと思ひしめさぬか。としなだれかゝれど。ふむうと氣のない返辭に少しぢれつく。然も間の抜けたる時折よく燈火はぱつたりと蟲に消されて眞の闇。憎や此燈火めと后は釋迦を押轉す途端。兩手をばんとはたき給ひて。なあつる何でござんす。今の燈火は頓死かなといふ風の調子なれば。おほい父母親類の間も此通り互の思はく違ひけるが遂に此豪傑發奮して。海燕辭し去る珊瑚の枝。それより幾年の修業。毎日々々泣きツ面の揚句。佛頂面になりまして四十年の説法。其人のどの詰りは切どうぢや。笑つて居られたりと考へて見れば。意地汚なの齒の中毒。跋踈河で

のたれ死矢張り泣きツ面の佛頂面。此處が妾の惚れた所どうやら耻づかしいやうな女子だてらにお饒舌やどさげすんで下さるな。妾の思はくでお釋迦様を大歌人ぢやと申す譯は斯うでござんす。お釋迦様は。元來初一念が悲しいといふ事。果敢ないといふ事。情ないといふ事について動いた者故。其後は始終悲しい果敢ない情ないといふ方から。大千世界をお覗きなされ。お覗きなされればお覗きなさる程。尙々悲しく果敢なく情なう思召すより。人の氣のつきもせず知りもせず悲しさ敢果なさ情なさまで探し出され。黒塗の馬車静々と。毛色艶やかな駒に牽かせ春の彌生に櫻狩りするそん所その姫君が「花に風輕く來て吹け酒の泡の動くだけ」と秀句いふて木の下に停り給ふを見て。やアびいどろが櫻につるさがつて居るはと駄評する男と違ひ。やれ美人は花に風を恨みてあの和しい心を傷めて居れど。風は遠慮なく花は時に應じて頓てほろりゝと落散るであらうものを。自分の色香も其通りと氣が注いで居る笑止さ。其一類眷屬は又此姫の花を見許さず。翠の黒髮柳清香の井筒油のどお洒落ありたけ仕て居る今こそ不動の縛繩より強く。摩利支天の駐出

すをも止むれど。末は逢が下の塵。山犬も此白髭昆布
には閉口と食ひ残すなるべく。青蓮の巻葉見た様な細
眼うるはしく。じろりと一度情を送られては。英雄も
三年の熱病に苦しめらるれど。後は一顆の爛葡萄。嘴
太鳥が用赦なく抉り出して舌打ちするなるべし。泥に
塗れ馬蹄に踏まるゝ花薺はまだしもの事ぞかしと大息
ついで泣かるゝ質故。どうか此花の散るに恨みのない
様美人を慰めてやりたく。美人の死ぬにも親族當人を
平和にさせてやりたく。満天下の男女をも自分をも福
徳圓滿の境界に安坐させたく。其時分の學者の門々を
叩きてまはられたが。さりとては詰らぬ加持祈禱めく
ら信心へば理窟の外には何もなく。浮世の諸分の話せ
る粹めもなければ。獨り相手のない山中に物思はしく
寂然と。早乙女が戀に沈んだ格の鹽梅に。眼の前に朦
朧ちら／＼と立つ者を捕へて。口舌でもやられたり。
ぢれつたいと空を打つたり。いッそ死にたいとめそめ
そ泣いたり。今度逢つたら。突然飛付いてあの御手を
腮の下にかい込んで。斯うすねて斯う口舌を仕ようか。
あや／＼斯う云はれたらどうしよう。何もないにど
ツきりしたり。色々妄想の大長刀を縦横十文字卍字巴
に振り廻されしが愈々思ひ切つて出たる曉「みるく」

屋の配達に一合の乞食の味を覺えられたるこそ可笑け
れ有りがたけれ。即ち説出されて長歌短歌。之を一切
の經と名付けて無暗とありがたくせしは。後世のどこ
ひようの取計らひ。悲しや釋迦様が天下の木男岩女の
あはれを知らぬ人達に。戀ひ焦れて泣きながら口説る
る濡の文句の根本あはれ深きを。天下の男女親父様の
異見の様に聞きなすより。蕩樂者は何云はしやると鼻
であしらひ。正直娘は「い／＼」と頭を無理に下げ。
發明息子はその肩に被つて外の兄弟をいぢめ。伶俐な
女は敬して遠ざけ。學問の積んできた男は一鎗突込み。
あはれ／＼世界に類なき人情深き肺肝親切温暖な胸中
より流れ出たるほんにやさしのお言葉を嚙ばどんなに
甘味もあらうを。千鍊万鍛一條の鐵理窟と見なし。そ
れでも此處が行けぬ彼處が分らぬと。精神の外は文字
も形容も假物の詩歌なるを知らいで。詠み捨ての反故
を相手に。蹇蹇に跨がつて落月を追ふ穿鑿。白痴と云
はうか。阿呆と云はうか。群盲が象を摸したとは違ひ
て。何れも様方御聰明ちやとて。黒闇の穴の中で黒豆
を見分ける事は。おほ／＼。笑止や。それはまだしも口
惜いはひいきの引倒し。完全な宗教者ぢや高僧の哲學
者ぢやなぞと。燈心蜻蛉の見え透つた羽根を怒らして。

蓮の花を東西に動かしながつて居る様なら片腹痛けれ。成程念佛宗題目宗旨言宗など色々のお宗旨。今となつては宗教かも知れぬが。お釋迦様は何宗。おほん。自分の宗旨を自分で造りて自分で信仰するならば。丹次郎はのろけ宗。由井の正雪は謀叛宗。勘平が鐵砲宗。團十郎が濫い宗とは聞いてあきれが蜻蛉返りする話。特更今年の智慧道徳の上から拵らへた者に甘んじて。來年の智慧道徳は進歩せぬ事受合ひ是で澤山だも極めて居る様な馬鹿。四歳になつて三歳と同じ根性持つか持てるか。さてくをかし。よしや自分で改正増補。去年の者を今年も引延し。來年も引延し。智慧經験が積むに従ひ延して行くなら。都合はよけれど護謨の尺度。さりとては當にならぬ頂上ぞかし。お釋迦様が又宗教製造人で。遠見に極樂佛界の高殿樓閣。金紙銀紙の張り細工。木戸の外には地獄の血の池赤いんき」を湛へ針の山に五寸釘を植ゑ。舌をぬちる「べんち」脊中をどやす摺小木を備へ。いらつしやいゝ極樂行きの券料は貪瞋痴三錢を捨ちるゝ代りに上げますぞ。五戒の五錢。十戒の十錢。段々と違ひます。上根の方は六度萬行。それ相應の價打ある報いは必ずござる。黄色の肌ぬぎになつて大汗かき呼立てれば。

阿彌陀殿は横の方の小門で。安い者ぢや。此方は念佛錢たいの一文ぢや。大負に負けてやるぞとわめき立つるならば。其景氣素敵滅法におもしろく。其丈で大入は受合ひなるに。要りもせぬ向ふ側に大乘館をたて。威儀堂々と演説仔細らしく。縮れ毛の中より電氣燈の管なんぞ耀かせながら。牛頭馬頭實に其形なし。彼方の趣向は斯うでござる。光學の説明から初めて首切り手品の種をあらはす様な辯舌を振られたのは。餘程半間の話しではありませぬか。寝ると打ちますよ。哲學家といふものは妾しの考へではお釋迦様とは玉と金ほどの違ひ。方便だの神通だの使はれては譬へば眞の哲學者にしても半文錢の價値ない一生の御議論。南京豆の袋となつて果てるがあたりまへらしく思はれまするに。偽作らしい三四部の御經をつかまへて。全體の御所業四十年間數々の歌は捨置き。高の知れた「あべらぐらす」で彗星の尾を見た様な詮議。それを堅く執着して此處「どうたき」の眞面目なんぞと思ふより。唯物論には打込れ。有神論にもつつつかれ。ぜたるじい」の一冊も讀んだ小供には。佛者の天地創成記毘藍風が吹いたとか。地に餅の皮が有つたとか。又は馬鹿らしい時間を空間と靈と肉とを一鍋にたき込んだ見

珍料理の須彌山説。耳が痒うて皆まで聞かれぬと冤罪まで負はされて嘲られ。譯の分つた人には白眼で一す睨まれ位の事。なるほど御一代の事は哲學の參考位にはなるか知らねど。浮世の男女に大熱々のお釋迦様が冷々淡々唯眞理を味はふ哲學者なら。阿含の子守歌歌ふて居るべきにあらす。畢竟大乘非佛説勝を得たらば。不完全な宗教製造屋とは云はるゝか知らねど。哲學者とは思ひもよらず。魚屋に「もゝんぢい」の注文なるべし。されば宗教家でも哲學者でもなし。宗教家哲學者としてはあり難からずと妾は思へど。妾の戀ひ焦るゝは全く歌人ぢやと思ふからの事。是も慥に眞實の引き倒しぞとは知れど。迷ひ込んでは中々鷲の山道に彷徨ひて。右も左も語るべき友ならず。前も後ろも皆胸合はぬ中なれば。露の助けもなく煩悩に面白からぬ月日を送り越し。無明の夢の長き夜は。耻かしながら方様のお姿まごゝと拜み奉つて。後いやまたす思ひにいつか氣も亂れ。髪もくしけづらず。唯々紀念の御歌數々を繰り返し讀み耽り。繰り返しては忍び泣くばかり。遂に親類一家の者に狂女と云ひ做され。追ひ出されてかゝる深山に逃來り。拙き五慾の塵をさ

け争ひを捨て安らかに住めば。嬉しや片戀の感應ありて語り得ぬ面白さへあるぞかし。抑々佛は愛執を斷じて。初めは乾慧地より段々と枯木の如く石の如く。始無劫來の情想因縁總べてほどけて。結局は八面玲瓏涅槃の境に入り給ふ。晴の上に魚鱗を掛けたる古今の幾人。當推量に人間らしくない者に取らなし。西施に向つて無鹽をほめる見當ちがひの批評取沙汰。其根本を究むるに第一情理の誤りなり。釋迦一代の御唱歌の文句に泥み宗教に縛られ。三世成程斯うした譯。大成程斯うした理由十二因縁斯うした理窟。斷常二見は是故いけぬと。白痴がシエクスピア集の講釋聞く様に。一葉々々理窟で斬りさいなんで注解付けて行く故に。一篇の精神どういふ形になつて露はれて居る事やら。どういふ的にそゝいで居るやら。分らぬも道理。障子の紙に頭をぶつけてはぶん／＼云ふてる此が百年たつても頭を突き抜く事の出来ぬ筈。此和郎達が何千人。銘々自分の取り付いた故紙の上に摺付木の箱程な理窟の四疊半を建て。究屈なにちり口を開け。物數奇な男を引き込み。三文にもならぬ香合を褒める事から稽古をさせ。枝炭の配り様幅紗のさばき様。乙にむづかしく教へ込み。洗ひ米を茶請にしたと云ふ元祖

の風流は三千里外に忘れ飛ばして。菓子ば春なら羊羹。口切なら蕎麥饅頭の熱いのに限ります。さりとては面倒な話し一切茶杓定規で推す故。つまりは釋迦様を理窟屋の大將と見なしたるこそ片腹痛けれ。それをまた其理窟に打てかゝるは。一度は蠅をなぐりし韓退之同様に。後世の其角程な幫間坊主にも笑はれるであらうと笑止千萬なり。元來瞿曇様は人情の火の手満身に燃えほこつて。權助をもおさんをも最惜い可愛い子の様に思はれた御方。中々後世の狸和尚山の芋居士の様なのんきな者ではなし。冷かな理窟じみた歌を垢の多い耳の孔に入れられたとて。何の冷たい理窟屋であらうぞ。はてまア「ピットル」を見に飲ます母の心が苦いか甘いか問はでも知れてる。目前の小さな愛を忍んで後々丈夫になれどの尊く深い愛ぢやに。見透しの付ぬ男どもも目の愛を忍ぶ所だけ見けて。大きな愛の匿れて居るに氣が付ぬ白痴。多一代の御詠歌冷うて苦いばかりを見てお釋迦様とは熊膽の凍つた者の如く考へ其眞似しても自分には大きな愛情がないに。何で小さな愛情を忍び得べき。されば佛一色々のへば理窟を捻られたが。御自分は少しも其理窟に拘泥頓着なされぬは。愈々溢るゝ程大きな愛情の熱涙を湛へて居られ

たに相違ない。それで無ばざつと一萬五六千日東西南北に駆廻りて恐しき日に焼かるゝも構はで。御舍利の汗をばたくと流し。廣長舌の糜爛する程息巻いて小兒には小兒。大人には大人。牛飼にまで。相應な者を賣り付けらるゝ小面倒が出来る者に非ず。若又一代自分の熱情を本に働いたではなく矢張り冷い理窟捻りのえそ賢人か偏人ならば。小判ぢやと木の葉で小兒を賺すには當らず。九十六種の外道の大頭ばかりを捕へて。非想非々想の酢の菫蕪のど蚯蚓の組打見た様な眞似をせられて居られそうなる者。且又五時八教。おほい猫の眼流の極が付ぬ事をいふた揚句。一字不説ぢや自己は知ぬ三年前の鳥の所爲だど。埒もない事云はずに眞の理窟ならこつつりと万年變ね黄金作りを投出さるべきに。斷常二見を兩方破して。幾何學上の線の上に自分は立つて何方にも落ちぬ様な顔なさるゝが。等分の境界を踏ぎ。片足づゝ兩方へ踏み込んで居るでなければ。線には幅なし。立つ瀬がござらぬ。そんな曖昧をやつて。佛は十四の難問に答へずど大智度論に斷られる様な事をして置くにも及ぶまい。さアして見ればどうしても理窟ばかりを眼中に存して。肉慾を始め小さな愛を捨てた野暮ではなく。大きな人情を胸に湛へ

て居て。機に臨み時に應じ。鞠歌も謡へば粉挽歌も謡ふた大歌人。前後始終文句が變り調子が變つたも不審ではなし。兎を鑄ても鳳凰を鑄ても。皆是れ箇々銀光を放つ。妾の胸の爐に情の火で熔かして見れば。般若と阿彌陀と鉢合せもせず。どろ／＼のどろ／＼となつて醍醐の味がする大人情。そもや其人戀しく思はずに居られませうか。斯う申したら妾は理の圈中に落ちぬ代り。情の圈中に落ちた。佛法を情解の眼鏡で覗くか馬鹿など仰せらるゝか知らぬが。佛法などは犬が食ふても鼠が引きても公認とならうが荒神と唱へやうが。私の知らぬ事。若し佛法を眞理と吻合した様に思ふて珍重するなら。釋迦の掄つた花を打落し。迦葉の笑つた横ッ面を蹴飛ばし。達磨の袈裟を雜巾にして。佛祖的々ばち／＼の以心傳心。そんな者は玉屋の符牒を洒落本で讀む様に心得たが良いらしい事。又何某禪師より印可證明。おほ／＼眞理會得の免狀を人間から貰ふたどてつまるまいに。眞理を捜すならそんな者は捨て。燃燈佛以前彌勒佛以後に佛法をさがして貰ひたいが。いや／＼それより蓮の葉に小便すれば御舍利が出来る。當體即佛の自分を尋ねたが良い。いや／＼佛法といふ側より。眞理といふ側から尋ねた方がどうせ五十

年の草臥まうけであらうが。まだしも男らしい。妾はむづかしい事は蟲が嫌ひ。唯々可愛い殿御の御心根に惚れた計り。普通觀念から佛といふ者の定義を立てたらどんな者か。夫等は後世の四疊半仲間の御相談に任せて。どんどん開きませぬが。何せよ氣の毒なは妾の戀人に誤ふものは神かと恐れ嫌ふ者は惡人の様云ひ傲し。世界には類少き粹様を取つて押へて。野暮の本尊とする輩の多いには悔しうて涙が顔れます。初めにも申した通り。初一念が人情の激動高尚の感情が浮んだが源で。一生想像を歌つた方様。最後まで始終浮世の半面を歌ひ暮らされ。殊更遺教經なんど一句一句理窟でやかましう云ふたら良いか悪いかわからぬが。其時の御齡御有様をじり／＼と考へ。尚能く親切に諄々と熱情を漲らせた御言葉。然も花の香のせぬではなく。其御餘裕が有て其御愛憐の切なるお心の中汲で見れば。慄としてありがた涙を顔をさぬなら。貴方も釐母しからずあゝ饒舌草臥れましたと云へば。男は先程よりの長談義聞飽て何時しか肝の音。女は御眉を逆立て星眼を活と見開此情無男めと大喝一聲。脳天より潑き掛る反吐瀧の如し。一斗の酒我に歸て男は逃出けるが其後女も行へ知ず猿の聲ばかり木の間にあり／＼。(完)